木綿の語

別府史談会　会長　友永　植

寒くなると外出に欠かせないのが、ダウンのコート。今年は暖冬でそうでもありませんが、近年、防寒着の定番となっています。ダウンは羽毛の綿入れですが、綿入れといえば、木綿の綿入れが懐かしいですね。幼い頃、少し重くなると、綿を打ち直して着せてもらったことを思い出します。

昨年（平成二十六年）、春の研修会で別府大学の浅野則子先生に大分県の山に因んだ万葉歌の講演をしていただきました（ご講演の要旨は本誌に掲載されています）。先生が引用された『豊後国風土記』に、由布山の名のもとになった「柚富の郷」について、「常に栲の皮を取りて、木綿を造る。因りて柚富の郷と曰ふ」という記事が出てきます。湯布院の地名の由来を説明する際によく引用される記述です。この『風土記』がいう「木綿（ゆう）」は、上述の「もめん」すなわち所謂コットンではなく、楮など木の繊維から作る布を言います。『豊後国風土記』の成立年代は八世紀前半といわれていますから、このころすでに「木綿」なる漢語が日本でも用いられ、木の皮の繊維あるいはそれで織った布を指して言っていたことが知られます。

中国においてはそもそも「綿」とは生糸の「まわた」を意味しました。「木綿」は、動物性の「綿」に対し、植物性の繊維ないしはそれで織った布をそのように称したと思われます。明・李時珍の『本草綱目』によれば、古来「木綿」には樹綿と草綿の二種類あり、樹綿は「交広（中国南部）」、草綿は「桂州（中国南部）」と「高昌国（西域）」の産物であったといいます。この内の草綿が所謂コットンで、やがて中国全土に普及していきます。

中国における「木綿」の語は、古くは三世紀の『三国志』に見え、よく知られている魏志・倭人の条に、当時の倭の習俗を伝えて「男子皆露紒、以木緜（綿）招頭」（緜は綿の正字）という文言が見いだせます。清・趙翼の『陔餘叢考』によれば、コットンが中国で広く栽培されるようになるのは、宋末・元初（十三世紀）以降といいます。従って、この倭人伝中の「木綿」はコットンとは先ず考えられませんので、草木の繊維ないしはそれで織った布ではないかと推測されます。

日本に「木綿」なる漢語が輸入されたとき、それに近い日本の物産が「ゆう（ふ）」であったことから、「ゆう（ふ）」が「木綿」の訓となったのでしょう。日本にコットンが本格的に輸入され普及するのは戦国時代以降といわれていますので、その頃から「木綿」の語はコットンを指すようになったのではないかと思います。

さて、今年は別府史談会が創設されから三十年目に当たります。この節目の年に、史談会を創設し今日まで導いてこられた諸先輩のご意志とご努力を思い、本会の更なる発展を期して、記念事業を計画しています。会員及び諸先輩方におかれましては、今後とも本会へのご理解とご協力を賜りますよう厚くお願い申し上げます。

平成二十八年一月